

校長先生の初恋物語

第69話 ダンプのパワーを見せてやれ

ダンプさんの走りは、まさに、ダンプカーのようです。大きな体で、はくりよくのある走りです。なんとなく、地面が揺れているようにも感じています。

体の大きなダンプさんですが、走るのはいくらも早いのです。だれよりも、パワーがありますから、走れば走るほど加速がついていきます。ぐんぐんと加速していくダンプさんは、なんと、トップに立ちました。「すごいで、ダンプさん。」とつくくんは自然にさげんでいました。

ダンプさんは、とつくくんの恩人と言ってもいいくらいです。5年生の始め、1人ぼっちのとつくくに声をかけてくれたのは、ダンプさんです。最初はこわいと思っていたけど、そうじゃない。ダンプさんのあの大きな体は、優しさでできていることに気づきました。それに、弱虫なとつくくんを変えてくれた人。弱虫なとつくくんを好きになってくれた人。とつくくんの心の中にだって、ダンプさんが好きだという気持ちは確かにあるんです。

今は、大好きなダンプさんが、ダンプカーになってがんばっています。ダンプさんを、大きな声で応援します。

「がんばれー。大好きなダンプさん。」



しかし、ダンプさんに、とんでもないことがおこってしまいます。調子よく走っていたのに、トップに立ったというのに、バトンを落としてしまうのです。原因は、ダンプさんの大きなお腹です。ダンプさんは、自分のお腹にバトンをぶつけてしまって、そのままバトンは落ちてしまいました。バトンだけにボトン。

「あーーーーーっ!!!」
6年2組のみんなは、頭をかかえて悲鳴をあげていました。落ちたバトンを拾うために、ダンプさんは走るのをやめて、数メートル後ろにもどりました。その間、1組3組は待つはくれません。後ろにもどっていくダンプさんをあつという間にぬいて行きました。また2組は、ビリになりました。せっかくダンプさんもがんばったのに、すべて台無しです。

ダンプさんが、あわててバトンをつかみました。すぐに走り出しました。顔は真っ赤で、目も充血していました。ダンプさんは、泣いていました。ダンプさんは、大きな声で何かをさげびながら走っていました。

「ばかーーーーーっ!!!ばかーーーーーっ!!!」
ダンプさんは自分を責めていました。ダンプさんは自分に向かって「ばかっ。」と言っていました。とつくくんは泣けてきました。ダンプさん、いいよ。自分を責めなくていいよ。

もう、2組の優勝はない。運動場にいた、すべての人が、そう思いました。とつくくんも、さすがにあきらめました。しかし、まだあきらめてはいない人がいました。そうです。次の走者は、きんに君です。

「ダンプさん、がんばるダチョー。まだあきらめちゃいけないダチョー。」

ダンプさんは、きんに君の言葉に、力強くうなずき、走り続けます。とつくくんは、あきらめていないきんに君の姿を見て、すぐに反省しました。そうです。まだ負けが決まったわけじゃありません。次は、筋肉もりもりのきんに君です。

泣きながらダンプさんがきんに君にバトンを渡しました。もう、1組、3組の走者ははるか先を行ってました。あきらめても仕方ないくらいの距離なのに、きんに君は、ダンプさんに向かって言いました。

「ダンプさん、オレに任せろ。」

きゃーっ。きんに君、かっこいいー。ダンプさんはバトンをわたしたその瞬間、きんに君をハートの目で見つめていました。

つづく

次回予告 ばけものきんに君

